

一家の愛が建てた美術館

沼南町大津が丘の中村順二美術館が来月で1周年を迎える。ダウン症のため27歳で亡くなった次男が描き続けた五百枚に及ぶ絵を、父の中村勝さん（64）が美術館を建てて公開している美術館である。



④虫たち⑤太陽のかくれんぼ

順二さんは、午前中に下書きし、午後に色をつけた。1日1枚のリズムで描いていたという。どんな思いを込めていたのだろうか。色彩の豊かな抽象画が多い。鑑賞者の好みは分かれる。美術館の左は、兄の卓也さん夫婦が担当するカフェになっていて、コーヒーなどが楽しめる。訪問者は、ここで順二さんの絵というものに思いめぐらす。

2階が住居、一家を挙げての美術館である。

ダウン症の次男の絵を常設する 中村順二美術館 来月オープン1周年



16号線ぎわ、車が疾走しているけれど、中は静かである。壁の中に土を握ね入れたそうで、外部の音は遮断されている。クリの木の柱、太いナラの梁がほっとさせるような雰囲気を出す。百五十平方メートルのギャラリーに、21点の水彩画が展示されていた。一ヶ月ごとに展示替えをするという。

ダウン症で知的障害のあった順二さんは、小学校のとき、母親の勧めで絵を描き始めた。指導していた日本画家の北尾君光氏（守谷）は、「分別や技術にとらわれない、本質的な美しさがある」という。

半分は貸しギャラリーで、コンサートも開かれる。今は長縄えい子・久保年弘二人展。29日には、フルートとギターのジョイントコンサートが予定されている。

末広クラブ・逆井漫步76 平成16年11月